

臨床咬合の基本

～シークエンシャルオクルージョンを通じて～

榊原デンタルラボ 榊原功二

私は矢澤一浩先生（元日本顎咬合学会長）に師事し、12年間お世話になり、アメリカン・ナソロジー咬合学（いわゆる犬歯誘導咬合）を基本とする補綴装置製作を学ばせていただきました。その後元神奈川歯科大学学長 佐藤貞雄先生を通じてオーストリア咬合学を学ぶチャンスに恵まれ短期ですがオーストリアのウィーン大学に留学し Prof. Dr. Slavicek Concept（シークエンシャル・オクルージョン）について教授されました。

さてそのアメリカン ナソロジーは1926年、McCollum、Stallard、Stuart をメンバーとしてカルフォルニア・ナソロジカル・ソサエティーを設立したナソロジーのオーソドックスな処置法で、中心位咬合と下顎運動を咬合器に再現し犬歯誘導咬合の補綴装置の製作方法でしたが、現在は咬合に対する考えが変化しています。しかしながらバーチャル咬合器の基本構造は変わっていません。そこで私たち歯科技工士も歯科医師とともに下顎運動を考慮して「補綴物」が生体（口腔内）の中でどうあるべきかを考え、CAD/CAMによる製作物の微調整を技工士が行う事が現代歯科医療の前提であると考えています。

「身につけるということは、脳は入力だけではだめ、同時に出力されて初めて身につく。脳の出力はただ一つ、筋肉だけに依存している。」

東京大学名誉教授 養老孟司先生

筋肉の訓練時間を短縮することはできませんが、少しでも咬合論が身近なものとなるよう、日常茶飯事にあるケースを通して大臼歯の重要性及び犬歯誘導を理解してもらえようようにと考えています。「同じ言語・同じルール・同じデータ」で学び、さらに世界中の歯科関係の仲間とコミュニケーションできたらと思います。

「一芸は万芸に通じる、続けること、やめないこと！」